



見聞録 3

bootleg-books

一人でダウンライトを取り付けていたら、設備屋さんに声をかけられた。

「電気屋さん、作業中悪いんだけどさあ、ちょっとストリッパーあるかなあ？」

「あ、ありますよ」

「あ、本当？ちょっとだけ貸してくれる？」

「良いですよ」

脚立の下から見上げて困った顔をしていた設備屋さんに腰道具からストリッパーを取り出して渡した。

「いやーっ助かったよ。先刻うっかり間違えて二ミリの電線に歯立てちゃってさあ。俺のヤツ刃こぼれしちゃって、も一切り難いってらなくってさあ。じゃ借りるよー。ありがとうね」

嬉しそうにストリッパーを受け取ると、キッチンの天井にぶら下がっている電線の皮をパチンパチンと軽い音をたてながら切り、

「はーい。返すねーっ。やー、やっぱり電気屋さんのストリッパーは良いヤツだよねー。力入れなくっても簡単に切れちゃうね」

と、笑顔で道具を俺に返した。

そのまま慣れた手つきで芯線が剥き出しになった部分を換気扇に差し込み、

「よしっ」

シンクの上に置いていた換気扇のカバーをバタンッと嵌め戻した。

「ありがとねー。じゃ、お先にー」

脚立を畳んで部屋を後にして行った。

当たり前なんだけど現場って色んな職種の間人が出入りする。

俺達電気屋の他に、換気扇や排気口等を設備している設備屋。部屋の壁の骨組みを作る部屋内大工。出来た骨組みに石膏で出来た壁材を張るボード屋。その上に壁紙を貼るクロス屋。

電話屋やテレビ屋みたいな弱電屋。GL屋。クーラー屋。掃除屋。

...左官屋なんていうのはポピュラーな仕事だよね。

他にも色んな業種があって、それぞれにそれぞれの職人がいる。

でもって、職人には職人の道具ってモノが存在するんだ。

例えば大工だったら、ノギリ・トンカチ...なんて感じで、必要不可欠な道具が多数ある。で、それらを身近に持ち歩くために出来たのが腰道具なんだ。

因に電気屋って破格に使用する道具の種類が多かったりする職種の一つ。

コウイチさんの話では、仕事の内容が昔に比べて無茶苦茶複雑になったし、量も行程も増えたから、道具は増加の一途だそうで。

確かに電気屋って、他の職種と違って現場が始まってから業者に明け渡す最後の日まで現場での仕事が続くから、施工項目って他の比にはならないと思う。

腰道具に入るペンチやドライバーみたいな道具から始まり、大型なのは五十キロオーバーの電動工具まで多彩。

もしも本気で数えたら、道具だけでも百種類とか二百種類とかじゃきかないかもしれない。

それに電気屋って他のほとんど全ての業者と仕事が絡む珍しい職種だから、特に絡みの多い業者の道具まで揃えて持ってるぐらいだし。

更に照明器具やコンセントなどの配線機具なんかに代表される『電材』まで数に入れたら...もう千とか軽く超えそうだ。

休憩所兼道具置き場の『詰め所』が、他の業者より大きいのって、この道具の多さが理由だったりするんだよね。

俺なんか、未だに半分以上の名前が覚えられないでいる。

ストリッパーみたいにいつでも使う工具は直ぐに覚えられるんだけどね。

あ、ストリッパーって言うのはね。ちょっとエッチなお店とかで裸になって色々やってくれるお姉さん達の職業がそのまま語源になってる工具のこと。平たく言うと『電線の皮むき機』。このストリッパーにも形が大きく分けると二種類あってね、俺が使っているのは初級者用の柄を握るだけで皮がキレイに剥ける、通称『バシャンコ』（柄を握った時に『バシャンッ！』って音が鳴るから）ってヤツなんだ。

親方さんが『道具は良いモノを大切に使った方が上達する』って言って、結構良いものを貸与してもらっているから切れ味は抜群。ホント大事に使いたくなるし、コレを使うと仕上がりが俄然良くなる。

俺の腰道具にはその他にもペンチ、電気ハンマー、電気ナイフ、スケール（注・メジャーのこと）プラスドライバー、マイナスドライバー、モンキースパナ、ラジエツト、レンチ、ハッカー（注・針金固定用の道具。主に鉄筋作業時に使用）ニッパー、鉛筆、マジック、カッター、消しゴム、ハサミ等...etc etc.....

とにかく豊富。

何をしててもずっしり腰に重いけど、もしも突発の工事が発生した時とかに直ぐにコウイチさんや谷田君に道具を何でも貸してあげられるように準備している。

って言っても、ほとんど使われることは無くって、極々極...たまーに『あ、ソレ持ってますよ』って言って、渡すと『ええー？スゴいね』って驚かれる程度。（でも、それがまた良いんだよね）

俺自身使いこなせない道具もあつたりするんだけどとにかく便利。気に入ってるんだ。

腰道具にハケー一本だけって業者もいるけど、ココだけの話、だったら腰道具いらんんじゃないかなって密かに思っていたりす。

やっぱり腰道具に道具が一杯刺してある方が、何となくプロっぽいしね。

形だけでもプロっぽいのは良いことなんじゃないかなって。

お姉さんの腰道具を朝見たんだけど、同じ電気工なんだけどペンチ、ニッパー、ドライバー二本と、鉛筆、マジック、それとスケールしか持っていなかった。

女性の人だからなるべく軽くしてるんだとは思うけど、やっぱり毎日現場に来るか来ないかの差って、ここら辺にあつたりするのかもしれないな。

今みたいに設備屋さんに直ぐ道具貸してあげられて感謝されたりもするしね。

うん。道具って大切だよな。

考えながら、ちょっと気分が良くなって、小さく鼻歌なんて歌ってみた。

「～～♪」

ダウンライトのセットも天井の下地に当たらなくって、スムーズに出来た。

なんだか今日は調子がいいや。

午前十時の休憩時間。

「はい、どうぞ」

「お？恵美これはなんだ？」

「中国茶だよ。日本茶よりたくさん出せるからお茶の時間の時にでも使って。飲み易い方が良くかと思って、ウーロン茶にしておいたよ」

「おう、サンキューな」

高野電気工事は朝の仕事前に飲む一杯以外は自販機で買って来るもんじゃなくて、ポットで湧かしておいたお湯でお茶だのコーヒーだの自分の好きなものを好きなように煎れて飲んでいる。冷たい飲み物も四リットルのクーラーポットに麦茶を作っておいてあるんだけど、流石に寒くなってきたから売れ行きは今ひとつ。

バリエーションは各自の好みで持ち寄っているので結構多数。特にコーヒーなんかはインスタントにしても三種類。豆に至っては五種類以上。やろうと思えばコウイチさんが簡易コンロと直火式のエスプレッソマシンを持ち込んでいるから本格的なエスプリッソまで飲むことが出来る。

たまに匂いにつられて他の業者さんが貰いに来ることもある。

皆気前が良いから予備のマグカップになみなみと煎れてあげている。

すると今度はお礼にコンビニで大量のおやつとか差し入れてきてくれたり。（こういう所、現場の人達は絶対なんだ。結構律儀）

いつもは壊滅的な電気屋の詰め所も、このお茶セットのコーナーだけは綺麗な状態を死守しているくらいお茶って現場では大切だったりするんだ。

リアル現場カフェ...ってヤツだよ。普段だったら落ち着かないだろうけど、現場で仕事をしていてこういう風にお茶が出来るとものすごく落ち着くから不思議。

「お茶コレクションに足しておいてね。中国茶ってお茶っ葉足して、って考えはあんまりしなくて良いから、お薦めだよ」

「へえーお姉さんってお茶とか詳しいんですか？」

「チガウチガウ。アネキは食べ物全般に詳しいの。食い意地張ってっから」

「あ、そう。じゃあ食い意地の張っていないコウイチはこんなものもいらないうって言う訳です
すね」

「うわっ、お新香じゃないっすか」

「うん。最近嵌まっててね。えっとね、これが赤かぶ。コレが大根。大根はぬか漬けにしてある
んだよ。キュウリとナスは軽く浅漬け。結構自信作なんだ」

「やーっ、旨そうっすねーっ。俺、こういうの大好きなんスよ」

「嬉しいこと言ってくれるじゃない。さ、どうぞ」

「あ、スイマセンッ。じゃお先に...あ、スッゲー旨いっ」

「本当？うれしー。谷田君っていつも美味しそうに食べてくれるから好き。さ、お父さんも
どうぞ」

「おう。おー旨いなあ。母さんのより旨いぞ」

「エヘヘ。そう？岡野君も。はい」

「あ、頂きます。...あ、おいしいですねー」

「でしょーっ。結構お漬け物って中国茶との相性も良くってね。最近のイチオシなのっ」

「う〜っ〜」

あ、コウイチさん、唸ってる...

みんなで美味しそうに摘んでいるお新香をすっごく欲しそうに眺めているコウイチさんによ
やくお姉さんが声を掛けた。

「.....食べる？」

「.....うん」

お姉さんが笑ってお新香の入ったタッパーをコウイチさんに差し出した。

「じゃ『ごめんなさい』は？」

たっぷり十秒。お新香を目の前にして唸るコウイチさん。そして。

「ごめんなさい」

ポッキリ折れて、お姉さんに頭を下げた。

「おっ、いい子」

お許しが出来てポリポリと美味しそうにお新香を齧るコウイチさん。

何だかいつもと違って妙に可愛らしかった。

「ケケケッ。弱えーっ」

からかうように谷田君がコウイチさんの耳元で笑うと、

「うるせえっ」

ぷーっ！っと不貞腐れるのも笑っちゃう程に子供っぽい仕草だった。

「ねえお父さん、上下の挟み金具って後幾つ残ってる？」

「ん？...おいコウイチ、お前え幾つ残ってるか分かるか？」

「ああ、あれね.....んー...ユウ」

「.....ん？あー...一箱はあったかな？」

「あ、三箱ありますよ。朝見付けたんであの棚に纏めておいておきました。今使いますか？」

お姉さんは三人に（まったくもうっ...）って顔をしてみせると俺に

「うんありがと。じゃあ一箱貰って行くね」

と、笑顔で言った。

「多分後五箱ぐらい注文しといた方が良いよ」

「そうか？」

「うん。玄関スイッチでまず必ず二組使うから。ボックスレスがコレだけ多かったら他にもこの字が使えない所あるんでしょ？」

「.....あ、そうですね。確かに」

この『上下の挟み金具』っていうのは、スイッチやコンセントみたいな配線機具を壁に固定する金具のこと。

この固定金具にも二種類あって、壁の中の状態によって色々使い分けたり、時には加工してカスタマイズしたものを使用したりしているんだ。

「一部屋に七カ所ぐらい上下になる場所もありましたから」

「そうなの？じゃ、もっと注文しなきゃダメかも」

「おう。じゃあ注文しておくからな」

「忘れないでよ。来週までには必ず取っというてね」

「おう。でもなあ、来週は恵美には違う仕事を頼みてえんだよなあ」

「何でもやるよ。でも注文は必ず取っというて」

「ん」

親方さんはヘルメットに千切った布のガムテープを貼付けると、そこをメモ代わりにしてマジックで「ハサミ金具×7」と記入した。

「七箱で良いな。後は何か必要なのはあるか？」

「後は取りあえず大丈夫。木ビスと二十五のボディビスは一杯あるもんね？」

「おう、それは腐る程あるぞ」

「腐る程は注文しないのっ。もーっ」

「...っ。おいコウイチ、お前えは何か足りねえモンはあるか？」

「俺はへーキ」

「雄太」

「俺も大丈夫っス」

休憩時間は大事な打ち合わせの時間でもある。仕事の進行状況や不足材料の確認は必ず全員で行なう。他の業者との絡みやトラブルもココで報告。

俺なんかはまだ見習いだからあんまり意見らしい意見はしたことが無い。

...勿論全然違うんだけど...前の職場での会議を思い出して少し辛い。

大事な部分に分からなくて。簡単なことしか答えられなくて。

ぼんやりとお姉さんの作った大根のぬか漬けをボリボリ齧りながら、スーツ姿の自分の姿を思い出していた。

どれぐらいボーッとしてたのか

「岡野君」

コウイチさんに声をかけられてハッと我に帰る。

「あっ...なんですか？」

「疲れてる？」

俺の顔を下から覗き込むようにして聞かれた。

「あ、いいえっ。すいません、なんだかちょっとぼんやりしてました」

「岡野君って、たまにそういう顔する時あるんだよね。大丈夫？」

「はい。大丈夫です」

親方さんと谷田君の方にチラッと視線を向けると二人は次の行程の打ち合わせに入っていた。

気が付かされていない...ってどこかホッとしながらまたコウイチさんに視線を戻した。

コウイチさんはじっと俺の目を見る。

「仕事中はダメだからね」

メッ、って顔をして、それから笑った。

「ダウンライト、後何部屋？」

「あ.....後二部屋です」

「終わったら幹線やりたいんだけど、良い？」

「はいっ」

「じゃあ終わったら八階のBタイプのシャフト。そこら辺で俺達段取り組んでるから。軍手新しいのに替えといた方が良いよ。それから来る時に入線液新しいの一本持ってきてもらっても良い？」

「はい。わかりました」

「急がなくても良いからね」

くりっとした目はお姉さん似...かな？

コウイチさんはなぜか俺がぼんやりしていると良く声をかけてくる。

今みたいに下から覗き込むように。

年下なのに年上みたいな感じの声で。

...その度に何かすごく...不思議な感じがもやもやとして.....俺は慌てて体裁を取り繕う。

仕事に熱中しているしている顔を急いで作る。

...でも、コウイチさんには何もかも見透かされているような気がする。

.....何を？

.....良く分からないけど....

ダメだダメだっ。

集中。

仕事に集中っ。

現場に来てまで落ち込んでちゃダメだ。

今更なんだし。

それに本当に現場でボーッとしてるのは良くない。

「.....よしっ。じゃあ、やりますかね」

コウイチさんが膝をパンッと叩いて立ち上がる。

十時四十分。

少し長めの休憩時間終了。

これからは昼休みまで一気に作業だ。

出来れば午前中にコウイチさん達と合流出来れば良いな。

頑張るか。

コウイチさんに、

『早いなあ』

って言われてみたかったり。した。

見聞録 3

<http://p.booklog.jp/book/35514>

著者 : bootleg-books

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/bootleg-books/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35514>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35514>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.